

沢田遺跡

2017年3月

南陽市教育委員会

さ わ だ
沢田遺跡

南陽市埋蔵文化財調査報告書第14集

平成29年3月

南陽市教育委員会



S T 3出土土器

卷頭写真 1



沢田遺跡完掘状況（東より）



沢田遺跡完掘状況（北西より）

序

この度、南陽市埋蔵文化財調査報告書第14集「沢田遺跡発掘調査報告書」を発行する運びとなりました。

本書は、置賜広域行政事務組合南陽消防署の整備事業に伴い埋蔵文化財保護との調整を図るために南陽市教育委員会が実施した発掘調査の成果をまとめたものです。

沢田遺跡は、市内沖郷の島貫地区から郡山地区にかけて広がる弥生時代～平安時代の遺跡で、置賜郡衙関連遺跡である郡山遺跡群の中核を成す大きな遺跡です。調査は平成27年5月に試掘調査を行い、引き続いて本調査を実施しました。

平安時代の郡衙関連遺跡として重要な沢田遺跡の調査進展は、市内にあったと推定されている古代置賜郡衙の実態解明のために非常に大切であると考えています。沢田遺跡一帯では宅地化が急速に進んでおり、今後とも開発との調整を行い、遺跡の保護を確実に実施していくことが必要となります。

本市は、北に丘陵、南に沃野と豊かな自然に恵まれ、旧石器時代から中世に至る多くの遺跡が存在します。人々が生活した住居跡・古墳・役所跡・城館等の「遺跡」と、石器や土器等の「遺物」は、大地に埋まっている貴重な文化財という意味から「埋蔵文化財」といいますが、市内の至る所に悠久の歴史を物語るこの埋蔵文化財が眠っています。

現代に生きる私たちは、埋蔵文化財を大切にし、やむを得ず破壊される場合は、記録として保存し、歴史を後世に引き継いでいく責任があります。

結びに、本調査にご指導とご協力をいただいた佐藤鎮雄先生、佐藤庄一先生をはじめとする関係各位に、厚く感謝を申し上げます。

平成29年3月

南陽市教育委員会

教育長 猪野 忠

本書は、置賜広域行政事務組合南陽消防署の整備事業に係る「沢田遺跡」の発掘調査報告書である。

既刊の概報、調査説明資料などの内容に優先し、本書をもって本報告とする。

調査は、南陽市教育委員会が実施した。

出土遺物、調査記録類は報告書作成後、南陽市教育委員会が保管する。

調査要項

遺 跡 名	沢田遺跡		
遺 跡 番 号	昭和 58 年度登録		
所 在 地	山形県南陽市若狭郷屋字駅西ほか		
調 査 主 体	南陽市教育委員会		
調査実施機関	南陽市教育委員会社会教育課埋蔵文化財係		
調 査 期 間	平成 27 年 5 月 27 日～6 月 12 日		
調査担当者	社会教育課長 田中吉弘		
	社会教育課長補佐 角田朋行 (兼埋蔵文化財係長)		
	埋蔵文化財係 鈴木輝生		
	嘱託 吉田江美子		
報告書作成担当者	社会教育課長 佐藤賢一		
	社会教育課長補佐 角田朋行 (兼埋蔵文化財係長)		
	埋蔵文化財係 鈴木輝生		
	嘱託 吉田江美子 山田 諦 岩瀬順子		
調 査 指 導	山形県教育庁文化財・生涯学習課 佐藤鎮雄 佐藤庄一		

凡　　例

1 本書の執筆は、I・IIは角田朋行、III・IVは吉田江美子、遺物写真撮影は山田渚が担当した。

2 遺構図に付す高さは海拔高で表す。方位は真北を示す。

3 本書で使用した遺構の分類記号は下記のとおりである。

S K . . . 土坑 S P . . . ピット

S T . . . 竪穴住居跡 R P . . . 登録土器

4 遺構実測図の縮尺は各図に示し、各々スケールを付した。遺物実測図は1/3で採録している。

5 遺物番号について、本文中では以下の通り省略する。例) 第15図3→15-3

6 写真図版は任意の縮尺で採録した。

7 基本層序および遺構覆土の色調記載については、1997年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版基準土色帖」によった。

8 発掘調査及び本書を作成するにあたり、下記の方々からご協力、ご助言をいただいた。(敬称略)

佐藤鎮雄 佐藤庄一 阿部明彦 佐藤祐輔

目 次

I	調査の経緯	1
1	調査に至る経過	1
2	調査の概要	1
II	遺跡の立地と環境	2
1	地理的環境	2
2	歴史的環境	2
III	遺跡の概要	7
1	検出遺構	7
2	出土遺物	14
IV	まとめ	20

図 版

第1図	南陽市遺跡位置図	5
第2図	沢田遺跡調査位置図	6
第3図	沢田遺跡試掘トレンチ配置図	6
第4図	遺構配置図	8
第5図	S T 1 突穴住居跡	9
第6図	S T 2 突穴住居跡断面図	10
第7図	S T 2 突穴住居跡	11
第8図	S T 3 突穴住居跡	12
第9図	S K 4 土坑	13
第10図	T T 1 S T 4 突穴住居跡	13
第11図	T T 1 基本層序	13
第12図	突穴住居跡(1) 出土遺物	15
第13図	突穴住居跡(2)・遺構外 出土遺物	16
第14図	遺構外(1) 出土遺物	17
第15図	遺構外(2) 出土遺物	18
第16図	沢田遺跡出土遺物	21
第17図	南陽郡山遺跡群と沖郷条里	22

表

表1	遺跡位置図	4
表2	遺構観察表	19
表3	遺物観察表	19
表4	【参考】土器編年表	23

写真図版

卷頭写真1	S T 3出土土器
卷頭写真2	沢田遺跡完掘状況
写真図版1	調査状況
写真図版2	T T 1 S T 4 調査状況
写真図版3	調査区検出状況
写真図版4	S T 1 調査状況
写真図版5	S T 2 S K 4 調査状況
写真図版6	S T 3遺物出土状況 調査区完掘状況
写真図版7	S T 1 S T 2完掘状況
写真図版8	調査区完掘状況
写真図版9	S T 1 3 出土遺物
写真図版10	S T 2 3 S K 4 出土遺物
写真図版11	遺構外 出土遺物
写真図版12	遺構外・試掘トレンチ 出土遺物
写真図版13	試掘トレンチ 出土遺物
写真図版14	試掘トレンチ 出土遺物

I 調査の経緯

1 調査に至る経過

沢田遺跡は南陽市の郡山地区及び島貫地区に所在する。遺跡内に置賜広域行政事務組合南陽消防署の新築計画が生じたことから、埋蔵文化財保護を図るために対応を実施した。

対象地を含む一帯は、平成2年に30mメッシュで縦横1mの試掘穴を設定のうえ試掘調査を実施しており、対象範囲からは、弥生時代、古墳時代及び平安時代の遺物が検出されている。その後、平成20年には防災センター整備に係る協議・調整が行われ、対象地は盛土のうえ駐車場を整備する計画であることから、慎重工事の対応がなされた。

平成26年度に新たに消防署の整備が計画されることがになり、総合防災課と社会教育課との遺跡の保護に関する協議が実施された。現状保存を基本とし、従前の試掘成果を元に構造物の建設位置を調整し、可能な限り遺跡の保護を図ったが、やむを得ず工事により遺跡が破壊される範囲が生じる見込みとなったことから、遺跡の状況の確認と調査範囲の確認を行うため、平成27年5月初旬に市教育委員会が試掘調査を実施した。試掘により建設予定範囲内の一部で平安時代の遺物及び柱穴等の遺構が検出されたことから、記録保存範囲を決定し、引き続き市教育委員会が本調査を実施した。

2 調査の概要

調査は、事業地内4,510m²のうち、現状保存ができない、なおかつ遺跡保護層が確保できない範囲の約320m²を対象として、平成27年5月27日から6月30日を計画期間とし、本調査を実施した。

平成27年

- 5月27日～ 重機による盛土除去
- 5月28日 グリット杭設置
- 5月28日 資材運搬、テント設営、環境整備

5月29日～	粗掘り
6月1日～	粗掘りと並行し、面整理
6月2日～	竪穴住居、溝跡等を検出
6月4日～	遺構検出状況等の写真記録
6月5日～	柱穴等精査
6月8日～	遺構掘下げ、記録、写真撮影
6月12日	全体清掃、完掘写真撮影、資材撤収



調査区完掘状況（東から）

II 遺跡の立地と環境

1 地理的環境

沢田遺跡は、南陽市島貫字沢田・字六角・字阿弥陀前・字上西原・字波浪田・字下堂ノ前・郡山字樋越・字中堀、若狭郷屋字石田・字樋ノ越に所在する。南陽市郡山のJR奥羽本線赤湯駅から西へ約270mの位置で、地目は宅地、畑地（果樹園）、水田となっている。沢田遺跡は、南流する吉野川によって形成された宮内扇状地の扇央部から扇端にあたり、吉野川旧河道左岸の自然堤防上及びその後背湿地に立地する。

本遺跡が所在する南陽市は山形県の南部にある米沢盆地の北に位置し、白鷹山山頂を北端とする東西15km・南北24km三角形状の市域をなす。周囲は山々に囲まれ、東に奥羽山脈、南に吾妻連峰、北に白鷹丘陵、南西に飯豊連峰、北西に朝日連峰を望む。市の面積は、約160km²で、北部の山地が70%、南部の平地が30%を占める。盆地特有の内陸型気候を示し、寒暖差が大きい。積雪も比較的多く、年間降水量は1,500mm前後を測る。

白鷹山系を源とする吉野川は、市内を北の丘陵地帯から南の平野部へと貫流している。吉野川はかつては宮内から沖郷に向かって南流し、平野部西側の漆山を南流する織機川・上無川などと共に宮内複合扇状地を形成し、宮崎付近で最上川に合流していた。現在は、宮内から赤湯に向かって東南方向に流れ、高畠町から西流する屋代川と合流した後に大橋付近で最上川に合流している。各河川の流域には、流路沿いに自然堤防の微高地が形成されており、吉野川流域では主に沖郷の旧河道に沿って、宮内地区閥口から沖郷地区宮崎までその両岸に自然堤防がほぼ連続して形成されている。織機川・上無川流域では、梨郷地区砂塚から沖郷地区坂井まで河川の流路に沿って広範囲に自然堤防の広がりがみられる。織機川・上無川流域の自然堤防では粗砂（真砂土）の混入が多い砂質粘土の堆積が多く見られる。

吉野川は現在遺跡の東側約1,200mを東南方向に流れが、これまでの諸調査から古代における吉野川は、遺跡のすぐ西側を本流が南流し、遺跡の東側をそ

の支流が東南方向に流れていたと考えられる。

2 歴史的環境

沢田遺跡の所在する南陽市では、平成28年度現在で288箇所の遺跡が確認されている。

旧石器時代の遺物出土例としては、長岡山丘陵に立地する長岡山遺跡とその東側に位置する長岡山東遺跡や稲荷森古墳があり、後期旧石器時代に属するとみられるナイフ形石器が発見された。

縄文時代の遺跡は、市内に広く分布している。縄文草創期の遺跡は、北町遺跡、松沢遺跡、稲荷森古墳が知られ、有溝砥石等が出土している。早期から中期の遺跡は数が多い。早期の遺跡では、大野平遺跡、月ノ木B遺跡、上大作裏遺跡が発掘調査されている。前期の遺跡では総合公園内遺跡群が、中期の遺跡では長岡山遺跡、長岡山東遺跡、百刈田遺跡等で発掘調査が実施されている。後期・晚期の遺跡は、数が少なくなる傾向にあり、石畳遺跡、加藤屋遺跡、岩屋堂遺跡等で発掘調査が実施されている。近年の分布調査で中川地区川樋盆地の岩部山の岩陰から縄文時代の遺物が検出されている。

弥生時代の遺跡は、宮内扇状地の扇央部の旧吉野川沿いの自然堤防上に多く立地している。旧吉野川の上流から下流へ、沢見遺跡、中期の円田式や後期の天王山式並行の土器が出土した沢田遺跡、中期の土器と石包丁が採集された萩生田遺跡と続き、さらに1km下流の百刈田遺跡（高桑・佐藤2010）では、十数基の中前期の再葬墓が確認されている。織機川沿いで、中期の円田式の土器が採集された東高根遺跡や大仏遺跡、中期の桜井式の土器が表採された掛在家遺跡、後期の竪穴住居が発見された庚塙遺跡（押切・須賀井2007）等が知られ、扇状地中央部の自然堤防を中心に弥生時代の集落が展開していたものと思われる。また、上野山山頂岩陰や岩部山岩陰から弥生土器片が見つかり、祭祀等に利用された可能性があるが決定的な資料は出土していない（佐藤・佐藤1987）。

古墳時代の遺跡は、旧吉野川や織機川沿いの自然堤防上、長岡山丘陵などの独立丘陵上、扇状地の北東部、東部、西部の丘陵の尾根や斜面に立地し、飛鳥～奈良時代の終末期古墳も宮内扇状地北東に位置する山々の枝尾根の南斜面に分布している。

古墳は、平成27年度現在で終末期古墳を含め116基の存在が確認されており、古墳が54基、方形周溝墓24基、終末期古墳38基となっている。前期の古墳では、前方後方墳の蒲生田山3号墳・4号墳と前方後円墳の蒲生田山2号墳、方墳もしくは方形周溝墓が十余基確認された大塚遺跡（氏家・吉田2010）、円墳が3基確認された天王遺跡（高橋・小林2010）、長岡山遺跡で4基の方形周溝墓が確認されている（山田・吉田2013）。4世紀後半に築かれた県内最大の前方後円墳の稲荷森古墳は国指定史跡となっている。5世紀代には、経塚山古墳群・天王山古墳群、稲荷山古墳群、竜樹山古墳群が扇状地西部の山々の尾根に築かれ（角田2016）、平野部では宮崎地区の植木場一遺跡で5世紀中頃の円墳が確認されている（高橋敏ほか1998）。大谷地東側の松沢赤石山の急斜面に立地する松沢古墳群は、5世紀末～6世紀前半の合掌型石室を持つ積石塚古墳である（佐藤・佐藤1987）。集落は、旧吉野川沿いの自然堤防上に立地する沢田遺跡、百刈田遺跡や鍋田の寺田遺跡等、沖郷地区を中心として広い範囲に存在したと考えられる。近年の調査から中川地区川極では、岩屋堂遺跡周辺に古墳時代の遺跡があるとみられる。

奈良～平安時代の遺跡は、主に宮内扇状地の自然堤防上に立地し、唐越遺跡、清水上遺跡、中落合遺跡、沢田遺跡、庚壇遺跡、檜原遺跡、西中上遺跡、矢ノ自館跡、沢口遺跡、植木場一遺跡、富貴田遺跡や宮内扇状地北西部の丘陵地に立地する平野古窯などが確認さ

れており、発掘調査が実施された遺跡も多い。奈良～時代に南陽市一帯は赤井郷・宮城郷と呼ばれ、「郡山」という地名から沖郷地区には古代置賜郡衙があつたとみられている。郡庁の所在地は未確認であるが、沢田遺跡を中心に郡山遺跡群と称される濃密な遺跡群が広がり、周辺に広く条里制が推定できることから、郡庁はこの周辺に存在したと考えられている。中落合遺跡の発掘調査では区画施設を有する建物群が検出され、置賜郡衙の関連施設とみられる（氏家・高桑2007）。郡山周辺は小河川が島足状に流れ、その間に微高地が点在する地形となっていることや広範囲に広がる遺跡の状況から郡衙機能を分散配置している可能性もある。中落合遺跡や唐越遺跡では、条里制の区画に影響された遺構配置が見られ、沢見遺跡や西原遺跡等からは条里制水田の区画に関連するとみられる溝跡が確認されている。また、現在の赤湯駅近辺を流れる堰を肩川と呼び、古代からの水路とみられる（佐藤2010）。

中世の遺跡では、多くの城館跡が確認されている。最上氏と伊達氏、上杉氏の領国にあたる吉野地区、中川地区の街道沿いに特に城館跡が多い。宮内扇状地内でも自然堤防上や北部の山地との境付近に多くの城館跡が立地している。旧吉野川の両岸には、蒲生田館、若狭郷屋敷、中屋敷、中落合館等が立地し、独立丘陵上には、長岡山館、柄塙館等が立地している。扇端部を流れる最上川沿いには、大橋城、畿内城、宮崎館、梨郷南館等が立地している。山沿いでは、二色銀館、金山櫛山館、石切山城、宮沢城、漆山館、片岸館、梨郷上館等が立地している。発掘調査が実施された遺跡としては、単郭方形館と考えられる屋敷跡を検出した鶴ノ木館跡（石井・鈴木2006）や方形館を検出した天王遺跡等がある。

引用・参考文献

- | | |
|-------------|--|
| 佐藤鶴雄・佐藤庄一 | 1987 「南陽市史 考古資料編」南陽市史編さん委員会 |
| 石井浩幸・鈴木弘偉 | 2006 「鶴の木館跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第150集 |
| 氏家信行・吉田江美子 | 2007 「大塚遺跡・西中上遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第158集 |
| 氏家信行・高桑弘美 | 2008 「中落合遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第168集 |
| 押切智紀・須賀井明子 | 2007 「庚壇遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第161集 |
| 佐藤鶴雄 | 2010 「置賜郡の官衙関連遺跡」「平安初頭の南出羽考古学」山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館 |
| 高桑弘美・佐藤祐輔ほか | 2010 「百刈田遺跡第1～4次発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第184集 |
| 高橋一彦・小林児也 | 2010 「天王遺跡」遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第186集 |
| 高橋敏ほか | 1998 「植木場一遺跡」遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第59集 |
| 角田朋行 | 2016 「南陽市遺跡分布調査報告書（3）」南陽市埋蔵文化財調査報告書第11集 |
| 角田朋行 | 2016 「南陽市遺跡分布調査報告書（4）」南陽市埋蔵文化財調査報告書第13集 |
| 山田 淳・吉田江美子 | 2013 「長岡山遺跡・長岡山東遺跡調査報告書」南陽市埋蔵文化財調査報告書第7集 |

表1 遺跡位置図

番号	遺跡名	種別	時代	番号	遺跡名	種別	時代
1	沢田	集落跡	奈良～平安	59	北前	散布地	繩文
2	宮沢城	館、城館	中世	60	長瀬館	館	中世
3	宮内南館	館	中世	61	梅ノ木	散布地	奈良～平安
4	慶海山館	館	中世	62	井戸尻	散布地	奈良～平安
5	双松公園内	散布地	繩文・奈良～平安	63	西畠	散布地	平安
6	宮内熊野大社敷地内	散布地	繩文・平安	64	馬ノ墓	散布地・古墳	古墳・奈良～平安
7	久保	集落跡	繩文	65	大塚	古墳・集落跡	繩・古・奈～平
8	宮内小学校敷地内	集落跡	繩文	66	西中上	集落跡	奈良～平安
9	別所館	館	中世	67	将監屋敷	散布地	奈良～平安
10	別所山経塚	経塚	平安(保延6年)	68	長割	散布地	古墳
11	別所B	散布地	繩文	69	中里	散布地	奈良～平安
12	別所A	散布地	平安	70	上河原	散布地	平安
13	丸山館	館	中世	71	島貴	集落跡	奈良～平安
14	東屋敷	散布地	奈良・平安	72	唐越	集落跡	繩文・奈良～平安
15	東高堰	散布地	弥生	73	前畠	散布地	平安
16	富貴田	集落跡	繩文・奈良～平安	74	西原東	集落跡	奈良～平安
17	猫子館	館	中世	75	沢口	集落跡	奈良～平安
18	斎藤前	散布地	繩文・奈良～平安	76	間々ノ上	散布地	奈良
19	大清水	馬場	中世	77	鴻訪前	古墳・集落跡	繩文・古墳・平安
20	馬場	散布地	繩文・平安	78	矢ノ目館	集落跡・館	奈良～平安・中世
21	久根崎	集落跡	繩文	79	東六角	散布地	繩文・平安
22	源兵平	散布地	繩文・平安	80	早稻田	散布地	奈良
23	源兵立山	散布地	繩文・古墳	81	李の木	包蔵地	平安
24	内原三	散布地・古墳	古墳	82	們塚館	館	中世
25	蒲生田山古墳	古墳	古墳	83	們塚館／山	集落跡・館	繩文・中世
26	山居沢山D	包蔵地	平安	84	富塚	散布地	古墳
27	山居沢山B	古墳	古墳	85	沖田館	館	中世
28	山居沢山A	散布地	平安	86	沖田	散布地	平安
29	清水上	墳墓・集落跡	古墳・平安	87	前小屋	散布地	繩文
30	蒲生田館	館跡	中世	88	百刈田	集落跡・墓跡	繩・帝・否・否～平・承・吉
31	蒲生田舎南	散布地	繩文・奈良～平安	89	長岡山	集落跡	石・繩・古・奈～平
32	当時作	散布地	繩文・平安	90	長岡館	館	中世
33	観音堂	散布地	繩文・平安	91	稻時森古墳	散布地・古墳	旧石・繩・古・平
34	上野	集落跡	繩文・平安・中～近世	92	長岡西田	散布地	繩文
35	狸沢山古墳群B支群	古墳	弥生・古墳	93	長岡山東	散布地	繩文・古墳・平安
36	上野山古墳群	古墳	弥生・古墳	94	長岡南森	散布地	繩文・古墳・平安
37	庚塙	集落跡	繩・弥・古・奈～平	95	中ノ目下	散布地	奈良～平安
38	木之実小屋	散布地	奈良～平安	96	内城館	館	中世
39	東弁天	散布地	繩文	97	鶴ノ木跡	集落跡・城館跡	古墳・平安・中～近世
40	椿原	散布地	平安	98	熊の前館	館	中世
41	中落合	古墳・集落跡	古墳・奈良～平安	99	水上	散布地	奈良・平安
42	中落合館	館	中世	100	太子堂	散布地	平安
43	萩生田	集落跡・散布地	弥生・奈良	101	柳町	集落跡	中世
44	若狭經屋屋敷	館	中世	102	桜田	集落跡	平安
45	中屋敷	散布地	奈良～平安	103	内原七	散布地	繩文
46	西田	散布地	繩文・奈良・平安	104	狸沢山古墳群A支群	古墳	弥生・古墳・奈良
47	東唐越館	館	中世	105	北ノ沢山	散布地	奈良・平安
48	横沢	散布地	繩文・奈良	106	上野山古墳群大沢山支群	古墳	奈良
49	二色根館	館	中世	107	上野山古墳群長峰山支群	古墳	奈良
50	二色根古墳群	古墳	古墳	108	高木	集落跡	奈良・平安
51	中野山館	館	中世	109	東ノ北	散布地	奈良・平安
52	上野山館	館	中世	110	種ノ口	散布地	奈良・平安
53	鳥帽子山古墳	古墳	古墳	111	沢見	散布地	奈良・平安
54	鳥帽子山経塚	経塚	平安	112	町河原	散布地	奈良・平安
55	上ノ山	散布地	繩文	113	稻荷	散布地	平安
56	稻荷前	散布地	繩文	114	郡山中堀	散布地	奈良・平安
57	夷平	散布地	繩文・中世	115	山居沢山C	散布地	繩文
58	北町	散布地	繩文	116	久保田尻	散布地	平安

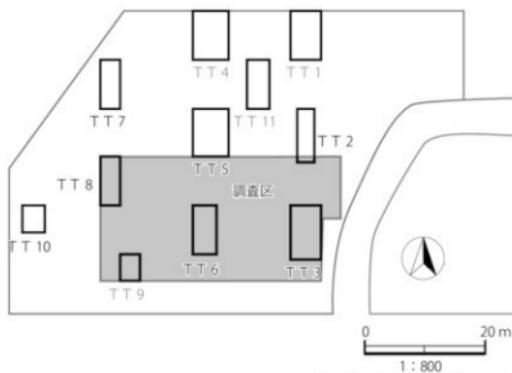


(国土地理院発行 2万5千分の1地形図「赤湯」使用)
第1図 南陽市遺跡位置図

III-1 棟出造構



第2図 沢田遺跡調査位置図



第3図 沢田遺跡試掘トレンチ配置図

III 遺跡の概要

1 検出遺構

沢田遺跡平成27年度調査区はJR奥羽本線の赤湯駅から直線距離で西へ約270mの地点に位置する。標高は221m前後である。周辺を住宅地と畑地に囲まれ、西側には旧吉野川を堰き止め造った「丸堤」がある。

今回の調査で、主な遺構として、竪穴住居跡4棟、土坑1基、ピット数基が確認された。

なお、遺構個別の規模・方向などの詳細は遺構観察表2に記載し、本文中では省略する。

竪穴住居跡

本調査では4棟の竪穴住居跡が検出されたが、面掘り調査区で3棟、トレンチ調査部分で1棟検出された。建物軸の方向にはばらつきがある。

S T 1 (第5図)

南東-北西方向に長方形の竪穴住居跡である。遺構は全体的に特に南方向の削平が顕著で、また西側隅が調査区外にあると思われる。北側角壁面に近い床面と、床面から延びる浅い溝状の遺構の床面には焼土が確認され、カマドと煙道の跡と思われる。

遺構の覆土は第6図の断面図のとおり10~20cm程度と削平が著しく、図化できた出土遺物は須恵器壺(12-1)の1点のみである。

S T 2 (第7図)

南側7度に傾く台形に近い竪穴住居である。S T 1と同様に煙道が東方向に延びているためカマドは東壁に位置したと思われるが、削平されたのかカマド本体や焼土などの痕跡は検出できなかった。

第7図の断面図のとおり、遺構の覆土は10~20cm程度と削平が著しい。図化できた出土遺物は須恵器壺2点(12-2・3)、土師器壺(か?)底部1点(12-4)である。

S T 3 (第8図)

遺構の大半が削平されていることや、調査区外にあることから全体像は不明であるが、建物はほぼ南北を軸とし、南壁にカマドおよび煙道と思われる部分が残っている。カマドについて、袖部などは削平されているものの、煙道内には焼土が確認された。

遺物は比較的良好な状態で出土し、カマド周辺の床面から須恵器壺(13-1)、土師器壺(12-6)、土師器小壺(12-7)、この他遺構内の覆土には古墳時代の壺の底部(13-2)などが混入している。

トレンチ調査部分(T T 1) S T 4 (第10図)

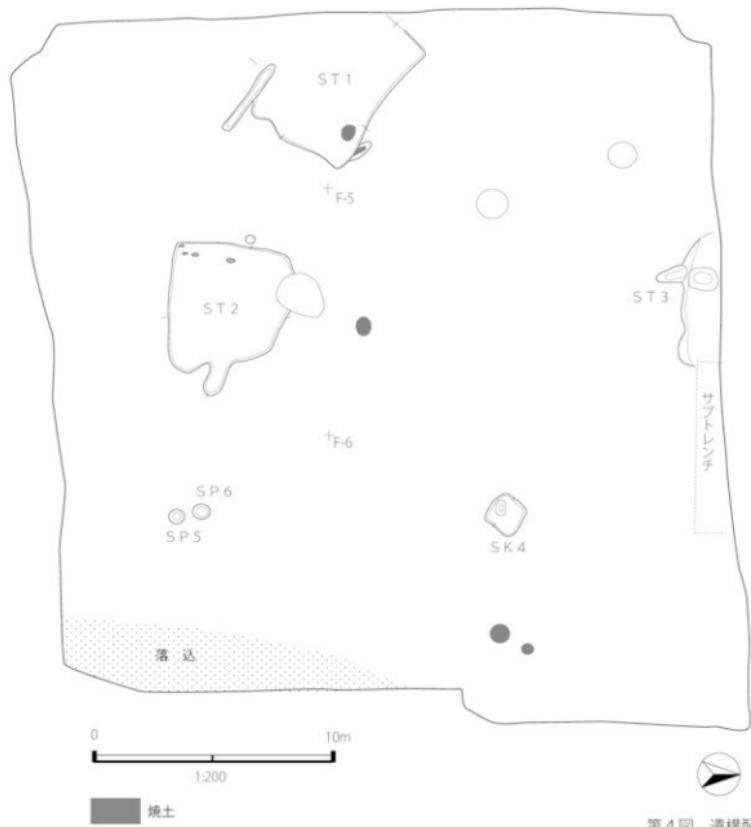
試掘トレンチT T 1から竪穴住居跡1棟の西角部分が確認された。南西部分辺にはカマドの痕跡と思われる焼土、貯蔵穴と思われる土坑と内部には土師器の小型壺(14-9)、そしてその脇には土師器の長胴壺(14-10)が良好な状態で出土した。しかし、東半がトレンチ外であること、遺構の深さ10cm以下と削平が著しく、遺構の規模・方向などの詳細は不明である。なお、西角には柱穴と思われるピットが存在する。

その他の遺構

土坑(第9図)

本調査では数基の土坑を確認したが、遺構とみられるものはS K 4の1基のみで、残りは後世の擾乱とみられる。

S K 4は隅丸方形の形状を呈し、西側底部に円形のくぼみがある。深さは10~15cmで著しい削平を受けたと思われる。土層断面を観察すると西側が細かい層状で、東側には木柱の痕跡がみられる。これらの状況から単独の検出であるが、掘立柱建物跡などの柱穴のうちの1基と推測される。遺構内からは須恵器壺(13-4・5)、双耳壺(13-6)が出土している。

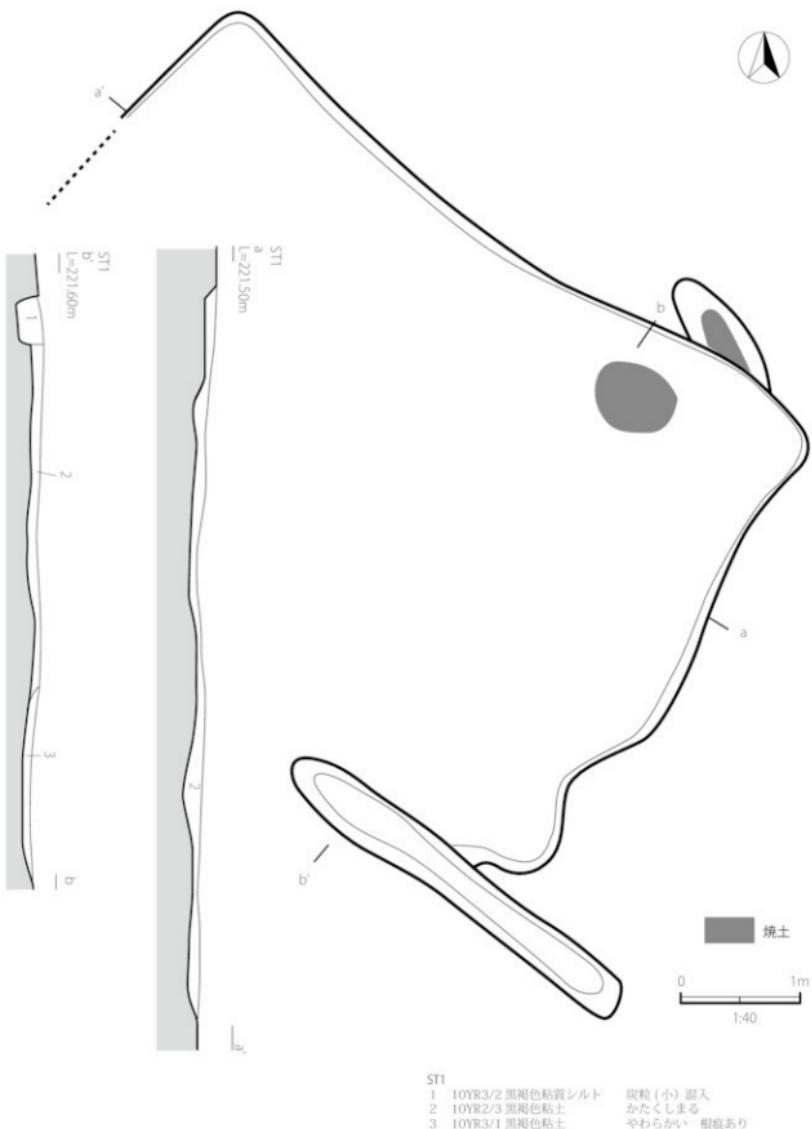


第4図 遺構配置図

落込み部分（第4図）

調査区東側に落込みと思われる部分が確認された。落込みからは調査期間中も湧水がみられたことから旧河川跡と推測される。覆土からは弥生・古墳・奈良～平安時代の土器の破片などが出土し（13-7～13）、

これらの遺物は層位に関係なく出土したことから、後世の流れ込みと思われる。



第5図 ST1 竪穴住居跡

III 遺跡の概要

- ST2
- 1 2.5Y3/2 黒褐色粘土
 - 2 10YR2/2 黑褐色粘土
 - 3 10YR3/2 黑褐色粘土
 - 4 10YR4/2 底黄褐色粘土
 - 5 10YR3/2 黑褐色粘土
 - 6 10YR4/1 褐灰色粘土
 - 7 10YR4/2 底黄褐色

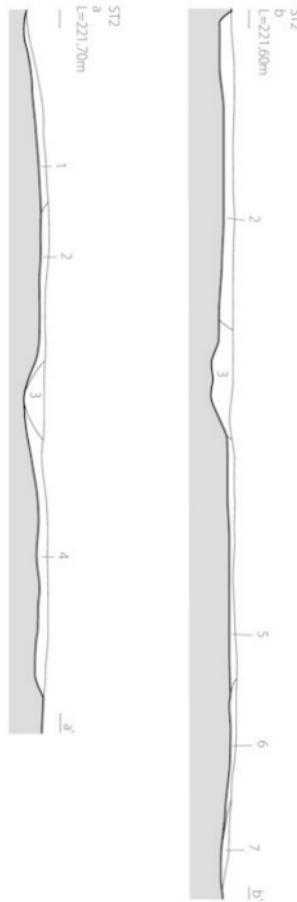
かたくしまる 粘粒（大）多量混入
 かたくしまる
 土器多量混入
 かたくしまる 土器粒少量混入
 かたくしまる 粘粒（大）少量混入
 かたくしまる
 かたくしまる



ST1 調査状況（北西から）

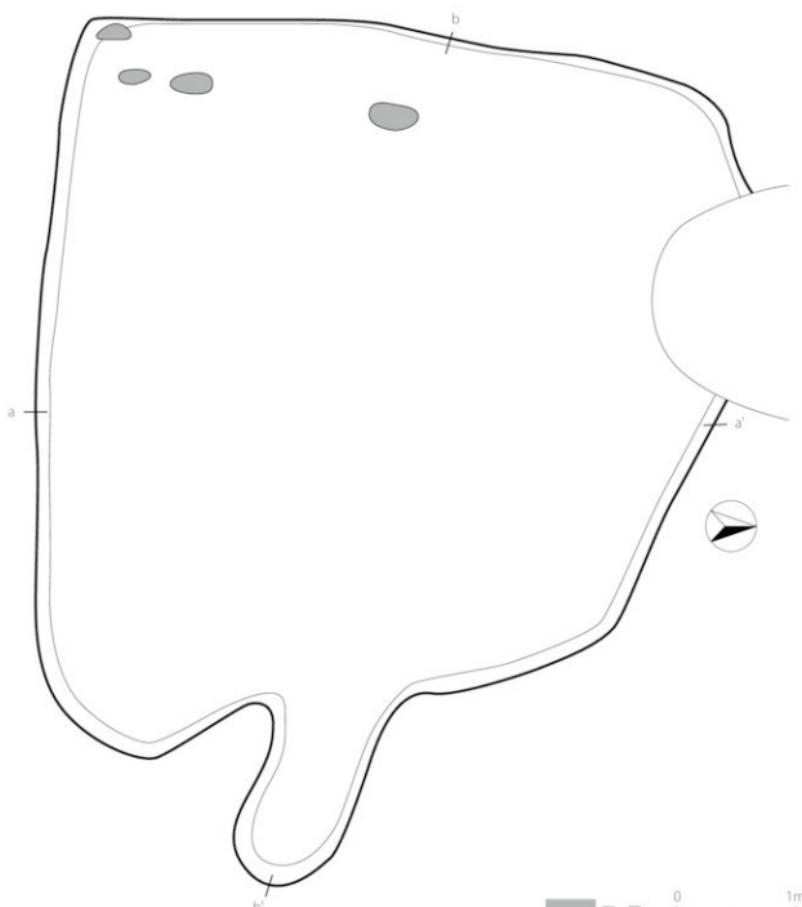


ST2 調査状況（西から）



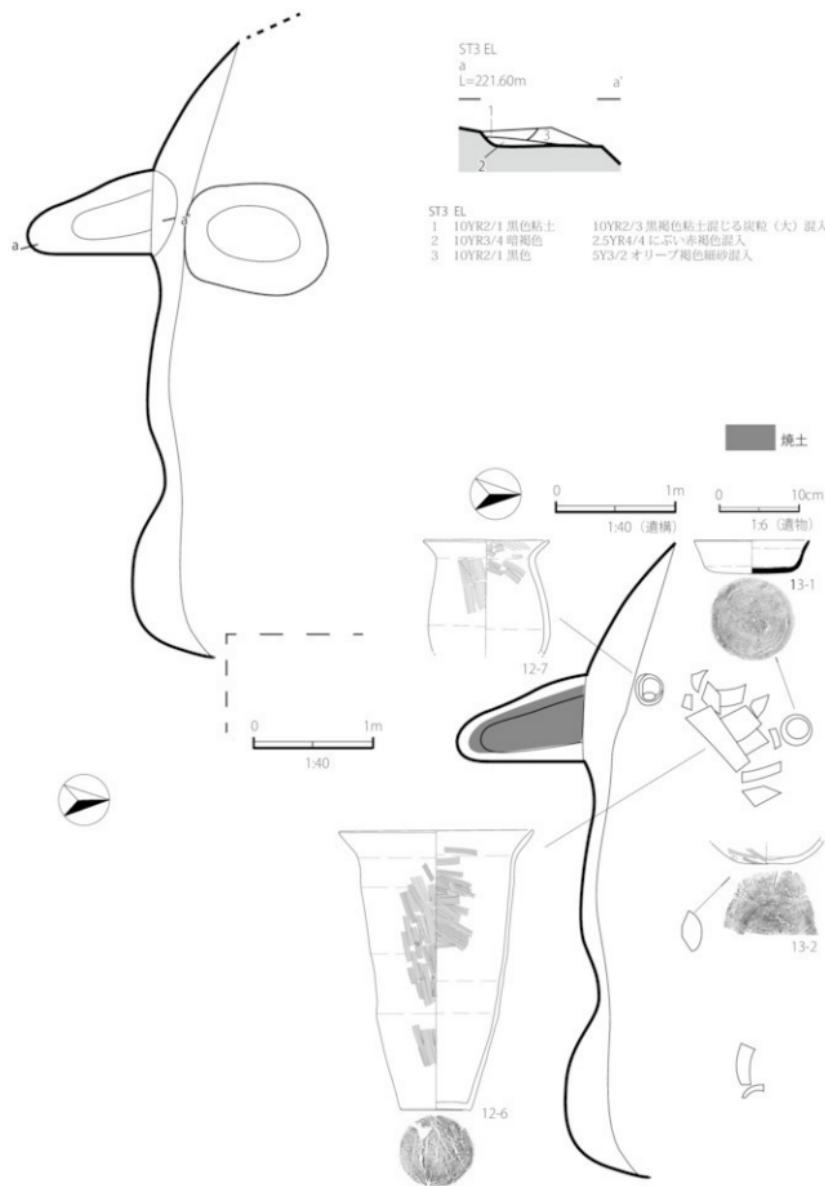
0 1m
1:40

第6図 ST2 積穴住居跡断面図

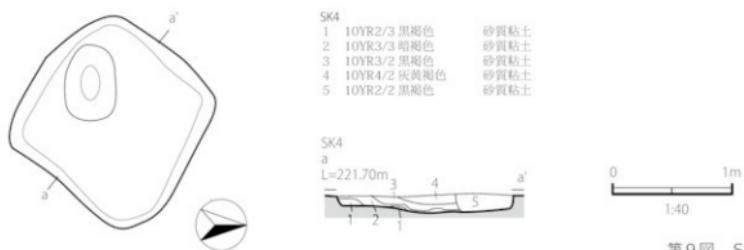


第7図 ST 2 穂穴住居跡

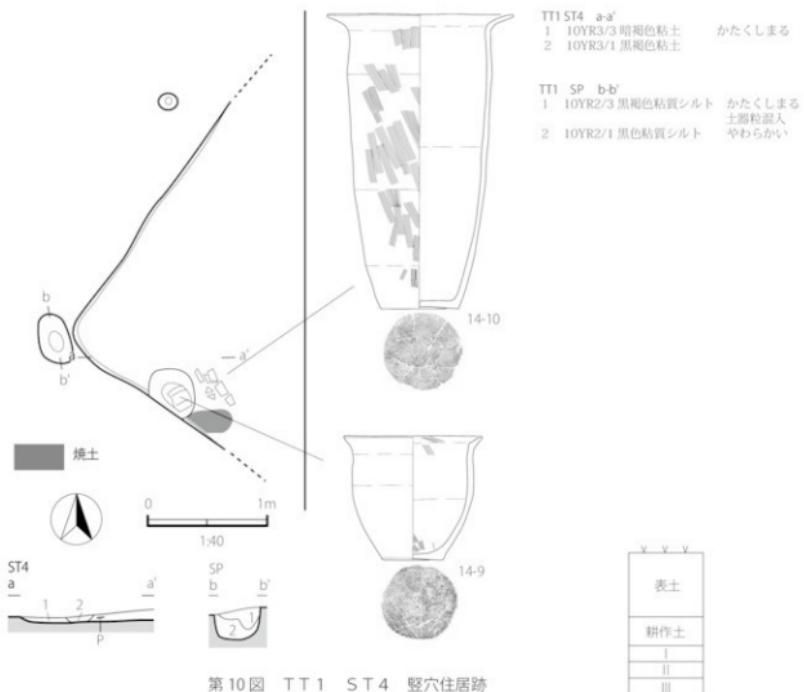
III 遺跡の概要



第8図 ST3 竪穴住居跡



第9図 SK4 土坑



第10図 TT1 ST4 竪穴住居跡

基本層序		
I	10YR4/4 褐色粘質土	土器粒・炭粒混入
II	10YR4/4 褐色粘質土	炭粒混入・かたくしまる
III	10YR3/2 黑褐色	粘土

第11図 TT1 基本層序

2 出土遺物

本遺跡より出土した土器は奈良・平安時代（8～9世紀）が中心であるが、縄文土器・弥生土器・古墳時代の土器も出土していることから間欠的に人々が生活を営んでいたとみられるものの、後世に大きく削平されている。

（1）縄文時代

縄文時代中期のものと思われる破片が遺構外から1点（15-1）出土している。鉢形土器の口縁部の溝巻き文様の突起部分と思われ、上部には細串による沈線文様が施されている。欠損が著しく詳細は不明だが、形状から大木8式と思われる。同様の土器は南陽市長岡山遺跡・長岡山東遺跡（山田・吉田2013）から出土している。

（2）弥生時代

弥生時代中期末～後期のものとみられる土器が出土している。東側落込み部分では器種は不明であるが、縄目と沈線を施した弥生時代後期のもの（13-7・8）が出土している^(註1)。

また試掘トレンチにおいても2本1組の並行沈線の破片（14-6）が出土している。これは南陽市百刈田遺跡（高桑・佐藤2010）の次段階（弥生時代中期末）に属するものとみられる^(註1)。また外面に縄文が施された土器（14-7）が出土している。器種不明としておくが、口縁は疑似口縁として加工した、深い容器を皿として転用したものと考えられる。土器の時期は弥生時代後期とみられる^(註2)。

（3）古墳時代

遺構から出土した遺物は僅少であるが、古墳時代前期と思われるものが数点出土している。土師器の丸底壺、甕、塊、高环が中心で、そのほとんどが調査区西側の落込み部分からの出土である。しかし遺構であるS T 3からも土師器の丸底壺（か？）（13-2）と、甕の体部と思われる部分（13-3）の2点が出土しているが後世の攪乱による混入と思われる。

遺構外遺物について、13-9は塊で、口縁部内部に稜があり口唇部は小さなつまみ出しがある。13-10は高环の坏部もしくは塊と思われる。脚部の痕跡は不明であるが、底部付近および中間部分に稜があり、やや内湾気味の形状であることから高环の可能性が高い。13-11は高环の坏部で、内面は磨滅が顕著だが外面にはミガキおよび赤色加工の痕跡が残る。形状は下部に稜があり口縁は斜め上に直行すると思われる。これらは完形ではないため詳細は不明であるが古墳時代前期に属すると思われる。13-12は小型丸底壺の底部と思われ、底部にはケズリによるくぼみが形成されている。全体の形状は不明であるものの、古墳時代前期に属すると思われる。13-13は壺もしくは甕の口縁部で、有段の複合口縁であるが、破片のため年代は不明とする。13-14・15は明確な器種は不明だが、台付甕の脚部ではないかと思われる。この2点は内外面ともに磨滅や火はねが著しく、特に13-14の外面にはススが付着している。

試掘トレンチ出土遺物について、塊（15-2・3）甕（15-5）が出土している。15-2は内外面とともにミガキ調整で無段口縁の丸底塊と思われる。また15-3は口縁が有段で、比較的大型の塊とみられる。外面はハケメ、内面はミガキ調整である。2点とも古墳時代前期と思われる。15-5の甕は底部を欠損しているが、体部はやや横長の球形を呈し、外面にはハケメ調整が、内面は磨滅している。頸部は「く」の字状にくびれが鋭角的で、口縁部は斜め上に直行する單純口縁である。古墳時代前期とみられるがやや古い印象があり前期前半に属する可能性がある。15-5は丸底壺底部で外面にはハケメ調整が行われている。古墳時代前期のものと思われる。

（4）古代

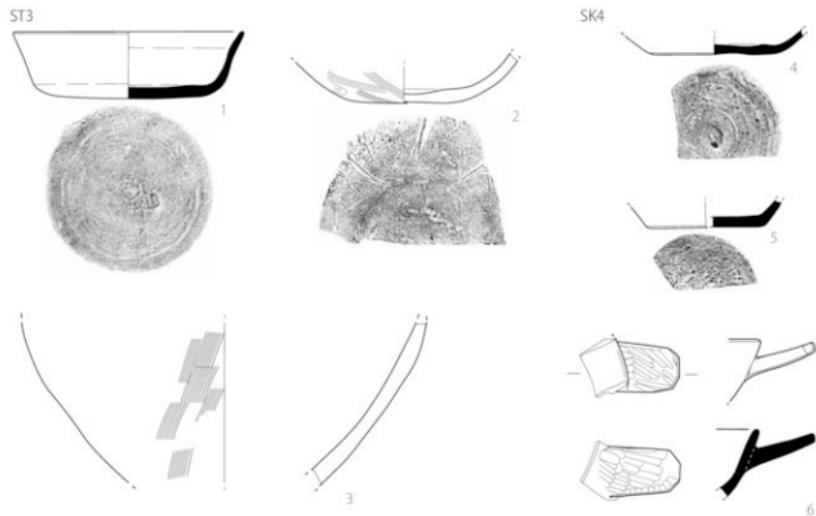
奈良～平安時代の須恵器坏・蓋・壺（？）、土師器甕が出土している。

S T 1からは須恵器坏（12-1）が1点、S T 2からは須恵器坏2点（12-2・3）、S T 3からは須恵器坏1点（13-1）、土師器の長胴甕が2点（12-5・6）、小甕が1点（12-7）が出土している。S K 4から須恵器坏2点（13-4・5）、双耳坏の

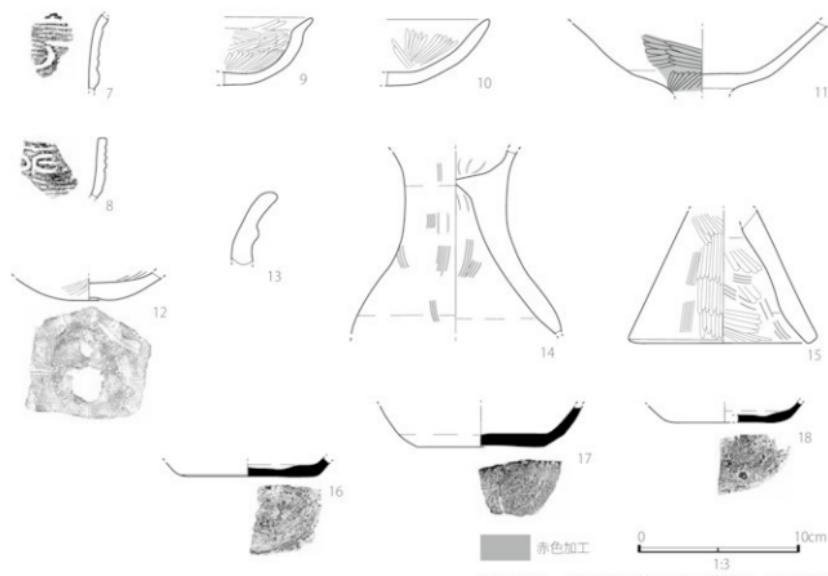


第12図 積穴住居跡（1）出土遺物

III 遺跡の概要

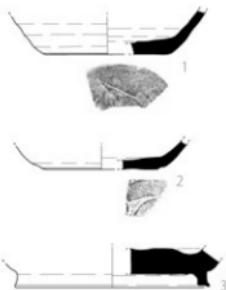


遺構外出土

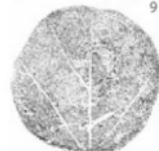
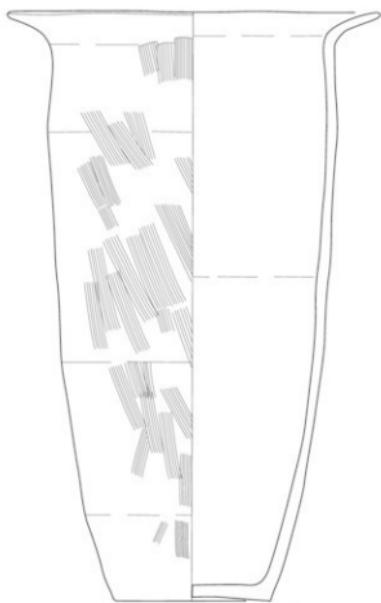
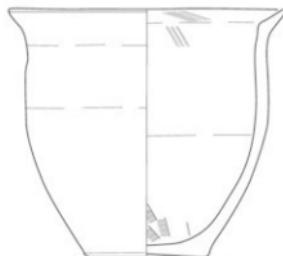
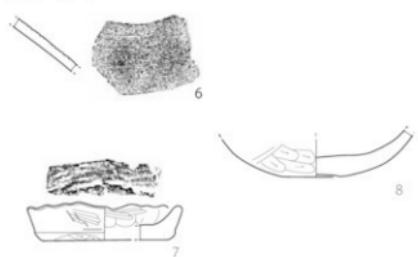


第13図 積穴住居跡(2)・遺構外 出土遺物

遺構外出土



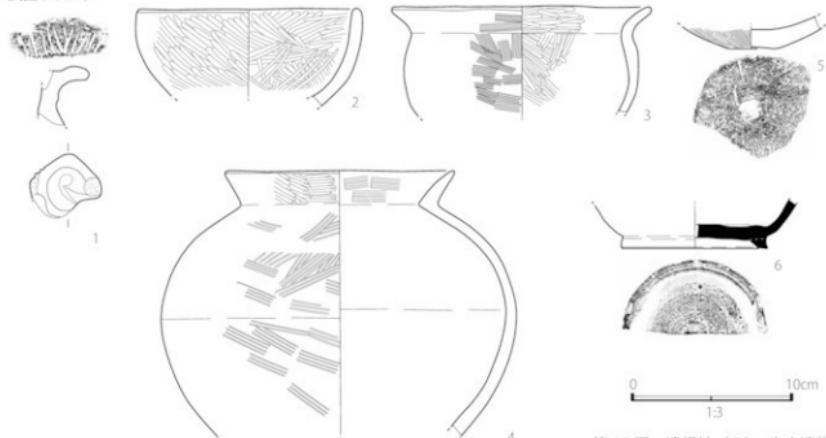
試掘トレンチ



0
1:3
10cm

第14図 遺構外 (1) 出土遺物

試掘トレンチ



第15図 遺構外(2) 出土遺物

破片が1点(13-6)出土した。また試掘トレンチ内の竪穴住居跡からは土師器の長胴甕が1点(14-10)、小甕1点(14-9)、須恵器の蓋が1点(14-11)出土している。

S T 3出土の环(13-1)は底部回転ヘラ切で环の箱型の形状であることから8世紀第2~3四半期頃に属すると思われる。13-4・5、14-1、の須恵器环について、底部は回転ヘラ切で、形状からも鑑みて8世紀第4四半期頃に属すると思われる。14-3については前記4点より新しい9世紀代のものと思われる。

試掘トレンチ内S T 4出土の須恵器蓋(14-11)についても上部が回転ヘラ切と見られることから8世紀第4四半期と思われる。遺構外出土の須恵器环(14-2)は底部切離しが回転糸切であることと形状から9世紀前半に属するとみられる。

土師器の長胴甕は全体的に胴にふくらみがなく、特にS T 3出土の12-6、試掘トレンチ出土の14-10は細長い形状の印象が強い。また火はねなどの使用痕が顕著である。そして、小甕がS T 3と試掘トレンチ内の竪穴住居のカマド近くから出土している。長胴甕とともにカマド周辺から出土していることからセット関係の可能性も考えられる。

S K 4から出土した須恵器环は全体の形状は不明

だが底部切離しが回転ヘラ切であることから、9世紀第1四半期までの範疇にあると思われる。また双耳环(13-6)も同様の時期とみられる。

遺構外出土の須恵器について、13-16~18の3点が出土しているがいずれも回転ヘラ切の底部でヘラケズリ調整が施されている。13-16は底部が広く8世紀第2~3四半期頃、13-17は9世紀第1四半期頃、13-18は8世紀第4四半期~9世紀第1四半期に属するのではないかと思われる。また試掘トレンチから出土した須恵器瓶もしくは壺の底部(15-6)については判断材料が乏しく時期不明とする。

註

1) 佐藤祐輔氏のご教示による。

2) 阿部明彦氏のご教示による。

表2 遺構観察表

遺構No.	遺構種類	方向軸	長辺(m)	短辺(m)	カマド方向	備考
ST 1	竪穴住居跡	N=47°~E	6.3	4.5	NW?	
ST 2	竪穴住居跡	N=5°~E	6.0	5.7	E	
ST 3	竪穴住居跡	N	5.0	-	S	
ST 4	竪穴住居跡	不明	不明	不明	SE?	

表3 遺物観察表

回復 番号	種別	器種	登録		計測値(mm)		調整技法		出土 地点	備考	
			番号	口径	進深	器高	器厚	外 面	内 面		
12	土師器	壺	-	-	(80)	-	5	ロクロ	ロクロ	ケズリ	ST1F
2	土師器	壺	-	-	(130)	(76)	40	5 ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	ST2F
3	土師器	壺	-	-	(70)	-	4	ロクロ	ロクロ	-	ST2F
4	土師器	小型壺	-	-	(26)	-	8	ミガキ・ハケ	ミガキ・ハケ	ナデ	ST2F
5	土師器	壺	-	-	(104)	-	7	ハケ	ハケ	木葉痕	ST3
6	土師器	壺	RP2	(240)	90	347	4	ハケ	ハケ	木葉痕	ST3Y
7	土師器	丸底壺	RP1	154	-	-	7	ハケ	ハケ	-	ST3Y
1	土師器	壺	RP4	142	110	41	4	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	ST3Y
2	土師器	壺	RP3	-	(74)	-	6	ケズリ・ハケ	不明	ケズリ	ST3Y
3	土師器	壺 or 壺	-	-	-	-	9	ハケ	不明	-	ST3
4	土師器	壺	-	-	(76)	-	6	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	SK4
5	土師器	壺	-	-	(70)	-	5	ロクロ	ミガキ	回転ヘラ切	SK4
6	土師器	双耳壺	-	-	-	-	5	ロクロ・ミガキ	ミガキ・ミガキ	-	SK4
7	弥生土器	不明	-	-	-	-	5	-	-	-	F-6G
8	弥生土器	不明	-	-	-	-	5	-	-	-	F-6G
9	土師器	壺	-	-	-	-	7	ミガキ	ミガキ	不明	F-6G
10	土師器	壺 or 高壺	-	-	-	-	7	ミガキ	ミガキ	不明	F-5G
11	土師器	高壺	-	-	-	-	7	ミガキ	不明	-	F-6G
12	土師器	丸底壺	-	-	28	-	8	ミガキ	ハケ	ケズリ	F-6G
13	土師器	壺 or 壺	-	-	-	-	12	不明	不明	-	F-6G
14	土師器	不明	-	-	-	-	12	ハケ	ハケ	-	F-6G
15	土師器	不明	-	-	(114)	-	13	ミガキ・ハケ	ミガキ	-	E-6G
16	土師器	壺	-	-	(80)	-	5	ロクロ	ロクロ	ケズリ	E-6G
17	土師器	壺	-	-	(80)	-	5	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	E-6G
18	土師器	壺	-	-	(72)	-	3	ロクロ	ロクロ	ケズリ	E-6G
1	土師器	壺	-	-	(80)	-	3	ロクロ	ロクロ	ケズリ	E-6G
2	土師器	壺	-	-	(70)	-	5	ロクロ	ロクロ	回転系切	E-6G
3	土師器	壺?	-	-	(120)	-	14	ロクロ	ロクロ	不明	E-6G
4	石製品	砾石	-	53	45	-	-	-	-	-	E-6G
5	陶器	不明	-	-	-	-	7	-	-	-	F-5G
14	弥生土器	不明	-	-	-	-	5	ミガキ?	ハケ?	-	TT1
7	弥生土器	不明	-	(96)	(80)	22	10	ミガキ・ケズリ	ミガキ・ユビ	-	TT3
8	土師器	丸底壺?	-	-	28	-	8	ケズリ	不明	-	TT1
9	土師器	小型壺	P1	(172)	94	153	7	不明	ハケ	-	ST4
10	土師器	壺	-	(230)	96	360	7	ロクロ	ロクロ	-	ST4
11	土師器	壺	-	-	(90)	-	7	ロクロ	ロクロ	-	TT1
1	縄文土器	不明	-	-	-	-	10	-	-	-	TT3
2	土師器	壺	-	(140)	-	-	8	ミガキ	ミガキ	-	TT2
3	土師器	壺	-	(160)	-	-	6	ハケ	ミガキ	-	TT2
4	土師器	壺	-	(140)	-	-	5	ハケ	ハケ	-	TT2
5	土師器	壺	-	-	(16)	-	8	ハケ	不明	ケズリ	TT2
6	土師器	高台壺	-	-	(90)	-	5	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	TT6

IV ま　と　め

沢田遺跡は「郡山遺跡群」と呼ばれる遺跡のひとつであり、南流する吉野川と織機川の旧河川道によって形成された宮内扇状地の扇央部から扇端部にあたり、旧吉野川の河岸段丘から後背湿地の部分にあたる。沢田遺跡はこれまでにも開発にともない山形県教育委員会が昭和 58 年に試掘調査を、59 年に緊急発掘調査を行い（佐藤・名和 1985）、その後も南陽市教育委員会が平成元年、2 年、4 年に調査を行っている（吉田ほか 2013）。ここでは今回の平成 27 年度発掘調査に過去の調査結果を加えながら沢田遺跡について考察したい。

平成 27 年度調査

平成 27 年度発掘調査は沢田遺跡内に建設される新消防署建物部分となる約 320m² の範囲での調査であり、沢田遺跡の範囲と想定される西端付近である。その調査範囲内において竪穴住居跡 3 棟、柱穴 1 基が確認され、これらは集落跡の一部と推測される。いずれも削平が顕著で竪穴住居跡のが深さ 10cm 前後とほぼ床面直上に近い部分しか確認できない状況であった。しかし僅かながらも年代の特定が可能な遺物が遺構から出土し、概ね 8 世紀後半から 9 世紀前半に存在した集落跡と推定できる。また試掘トレンチ T T 1 で確認された竪穴住居跡もその集落の一部であろう。

今回の調査で特に注目すべきは S T 3（第 9 図）で、北側の大半は調査区外で、カマドと煙道も大きく削平されているものの、8 世紀中頃の須恵器壺・土師器壺・小甕のセットが比較的良好な状態で出土している。またこの遺構からは古墳時代前期の土師器が出土しているが後世の擾乱による混じり込みと思われる。そして、遺構はほぼ真南方向を向き、カマドおよび煙道は南壁に設置されている。

今回の調査では第 4 図のとおり遺構の重複が見られないで、遺物の年代観による検証の上でこれらの竪穴住居跡の時期の新旧関係を推定すると、S T 3（8 世紀中頃）→ S T 2（8 世紀末～9 世紀初頭）→ S T

1（9 世紀前半）の順であると考えられる。

なお、今回は奈良～平安時代に属する遺構のみが確認されたが、西端の落込みからは弥生時代中期～後期、古墳時代前期、奈良～平安時代の遺物が出土している。おそらく層位に関係なく出土していることから後世に擾乱を受け遺物が落込み内に移動したと思われる。またテストトレンチから縄文中期の土器も出土していることから、この周辺は縄文時代から間欠的に人々が生活を営んできたと思われる。しかし、調査区北西には旧吉野川河川道の痕跡である「丸堤」が存在し、調査区東側の落込みから調査期間中も湧水があつたことから、この地は水位が高い後背湿地であり、居住性から考慮すると集落としてはあまり快適とはいえない立地であったであろう。

これまでの沢田遺跡の調査の成果（第 14 図）

前記のとおり沢田遺跡ではこれまでに昭和 58 年・59 年に山形県教育委員会が、平成元年・2 年・4 年に南陽市教育委員会が調査を行った。沢田遺跡は赤湯駅の西側に広がる遺跡で、その範囲内で開発される箇所について部分的に発掘調査が行われてきた。

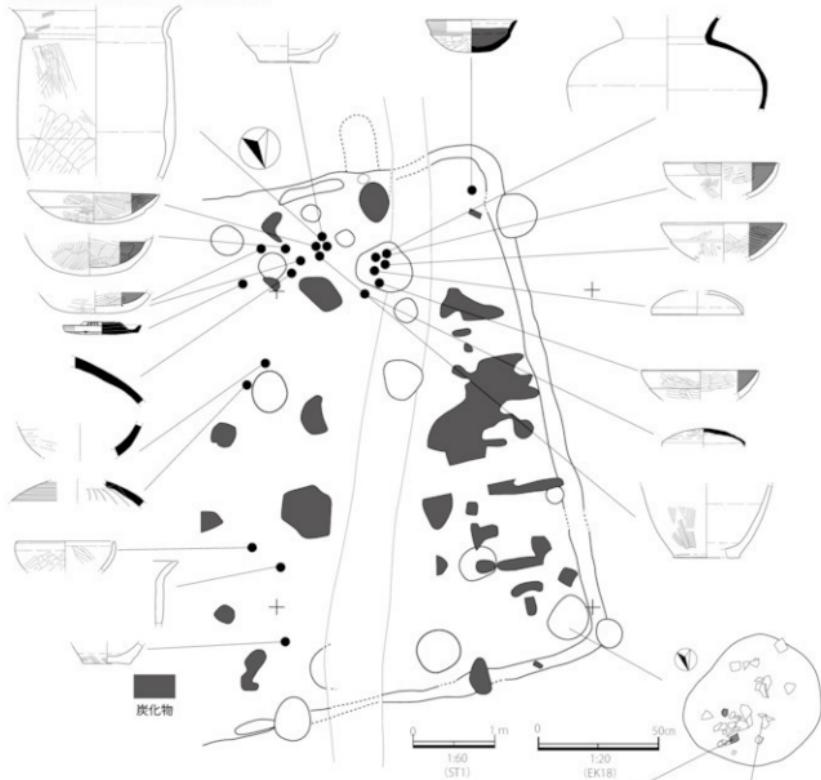
昭和 59 年度の調査では、竪穴住居跡 6 棟と掘立柱建物跡 4 棟、集石遺構などの遺構が確認され、弥生時代（中期・後期）、古墳時代（前～中期）、飛鳥時代、奈良～平安時代（8～9 世紀）の土器が出土している（佐藤・名和 1985）。

平成元年度の調査では、焼失家屋とみられる竪穴住居跡が良好な状態で確認されており、郡山遺跡群の主体となる時期よりやや古い 7 世紀末～8 世紀初頭のものとみられる多量の土師器や須恵器の土器や円面鏡・紡錘車が出土している。また遺構外から弥生時代、古墳時代、奈良～平安時代の土器が出土している。ところで、第 16 図・左下の高环について「郡山遺跡群・富貴田遺跡」（吉田 2013）では古墳時代前期・漆町 9～10 群並行期（4 世紀後半）に属するものと報告したが、漆町 3～4 群（月影式、2 世紀後半）並行期

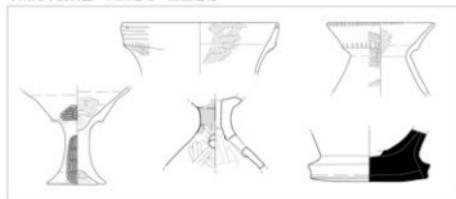
昭和 59 年度調査 沢田遺跡 出土遺物



平成元年度調査 沢田遺跡 ST1 遺物出土状況



平成元年度調査 沢田遺跡 出土遺物



「都山遺跡群・富貴田遺跡発掘調査報告書」(吉田ほか 2013)
「沢田遺跡発掘調査報告書」(佐藤・名和 1985) より転載

第 16 図 沢田遺跡出土遺物

のものであることをここで訂正したい。(註3)

結び

前記の通り、今回の調査範囲は320mと狭く、遺構面が削平が顕著だったにもかかわらず、古代の竪穴住居跡3棟が検出され、8～9世紀においては一般集落の一部と思われる。また、遺物は縄文から平安時代までと幅広い時期の遺物が出土した。

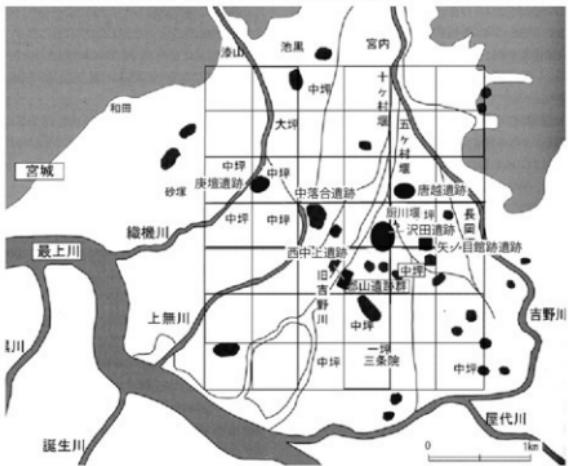
沢田遺跡から北東方向へ約700mに位置する唐越遺跡では区画施設や規則的に建てられた掘立柱建物群が確認されていることから官衙的性格をもつ遺跡としている(吉田・角田2016)。また旧吉野川河川道を挟んで南南西方向へ約1kmに位置する中落合遺跡(氏家・高桑2008)も同様の性格をもつ遺跡であり、両遺跡ともに8世紀後半～9世紀末のものと思われる。沢田遺跡を含む「郡山遺跡群」はそれらの遺跡の中間地点のやや南側に位置する。沢田遺跡は竪穴住居跡で構成され区画施設などが確認できないことから一般集落の様相が濃いと思われる。この3遺跡の位置関係を河川道の図に重ねると(第17図)、旧吉野川河川道

沿いに沢田遺跡・唐越遺跡のほか、古代の遺跡の広がりがみられる。また沢田遺跡と唐越遺跡の間には『厨川堰』があり、この堰は古代から存在したものと思われる。中落合遺跡は上無川に隣接するように位置している。また、溝から8世紀末～9世紀半ばに属する大量の墨書き土器や鳥形須恵器片、猿投産灰釉陶器片などの官衙的要素を持つ土器が出土した庚墳遺跡が沖郷地区の北西を流れる織機川沿いに位置している(押切・須賀井2007)。そして沖郷地区には第17図のとおり「中ノ坪」「大坪」「一ノ坪」「条」など条里制を想像させる字名が残っているほか、沖郷地区には条里的東西基線の大路と思われる道が現存している(佐藤鑑2010)。矢ノ目館跡遺跡で道幅約3mの畦畔状遺構を作り道路遺構が確認され(吉野1984)、最下層から8世紀代の环が出土しているが、主体となる遺物は9世紀末～10世紀初頭の土器や木器である。また西中上遺跡では南北に走る溝2本(S D 5・S D 6)があり出土した土器からS D 5は8世紀第4四半期～9世紀前半、S D 6は9世紀後半と報告されている(氏家・吉田2007)が、この溝についても沖郷条里の名残りの可能性が考えられる。

以上のとおり、沢田遺跡は8世紀後半～9世紀末の官衙的遺跡もしくは条里制遺構に囲まれた一般集落遺跡であり、旧吉野川の後背湿地という地形ながらも居住地域として利用された地域であるということが30年間という発掘調査期間を経て明らかになったといえよう。

註

3) 阿部明彦氏のご教示による。



第17図 南陽郡山遺跡群と沖郷条里
「第IV章 置賀郡の官衙開闢道路 第3節 南陽郡山遺跡群」
『平安初期の南出羽考古学—官衙とその周辺—』(佐藤鑑2010)
より転載・加筆

表4 【参考】土器編年表

実年代	漆町編年	北陸編年	東海編年	畿内編年
AD 0	V - 1	猫橋	山中式後期	V様式
	V - 2			
	V - 3			
AD 169	2 - 1	法仏	延慶Ⅰ式	VI様式
	2 - 2			
	3 - 1			
AD 258	3 - 2	月影	庄内Ⅰ	庄内Ⅰ
	漆町4群			
漆町5群	漆町6群	白江	延慶Ⅱ式	庄内Ⅱ 庄内Ⅲ
	漆町7群			
漆町8群	漆町9群	古府クルビ	延慶Ⅲ式	庄内Ⅳ 布留Ⅰ
	漆町10群			
		高島	松戸式前期	布留Ⅱ

加藤学 2011 より転載・編集

引用・参考文献

- 阿部明彦
阿部明彦・水戸弘美
阿部明彦・吉田江美子
氏家信行・高桑弘美
氏家信行・吉田江美子
押切智紀・須賀片明子
角田朋行
加藤 学
- 佐藤鏡雄・佐藤庄一
佐藤鏡雄
佐藤庄一・名和達明
菅井敬一郎ほか
高桑弘美・佐藤祐輔ほか
山田 純・吉田江美子
吉田江美子ほか
吉田江美子・角田朋行
吉野一郎
- 2015 「出羽南半における古墳時代のはじまり」『ふたかみ邪馬台国シンポジウム 15 資料集』ふたかみ史遊会
1999 「山形県の古代土器編年」『第25回古代城柵官道跡検討会資料』
2004 「出羽の土器とその編年」『出羽の古墳時代』高志書院
2008 「大塚合遺跡・西中上遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第168集
2007 「大塚遺跡・西中上遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第158集
2007 「大塚遺跡・西中上遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第161集
2016 「南陽市遺跡分布調査報告書（4）」南陽市埋蔵文化財報告書第13集
2011 「正尺C遺跡出土の鍋文施文土器一天王山系土器の下限を探るー」『研究紀要第6号』
(H) 新潟県埋蔵文化財調査事業団
1987 「南陽市史 考古資料編」南陽市史編さん委員会
2010 「置賜郡の官衙関連遺跡」「平安初頭の南出羽考古学」 山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館
1985 「沢田遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第88集
1990 「南陽市史 上巻」南陽市史編さん委員会
2010 「百刈田遺跡第1～4次発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第184集
2013 「長岡山遺跡・長岡山遺跡」『南陽市埋蔵文化財調査報告書第7集』南陽市教育委員会
2013 「郡山遺跡群 富貴原遺跡」『南陽市埋蔵文化財調査報告書第6集』南陽市教育委員会
2016 「唐越遺跡」「南陽市埋蔵文化財調査報告書第12集」南陽市教育委員会
1984 「郡山 矢ノ目館跡遺跡」『南陽市文化財調査報告書第1集』南陽市教育委員会

写 真 図 版



作業風景



調査前状況（東から）



調査前状況（南から）



重機稼働状況（南西から）



調査区面整理作業（東から）



TT 1 遺構検出状況（北から）



TT 1
ST 4
(南から)



TT 1
ST 4 完掘状況
(南から)



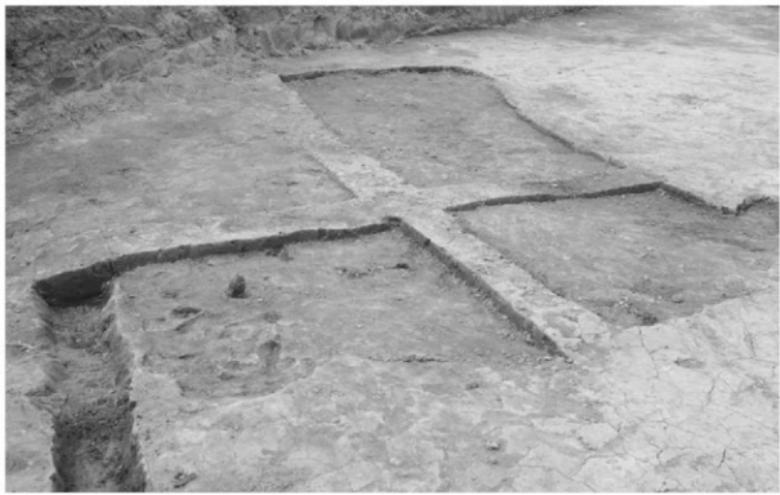
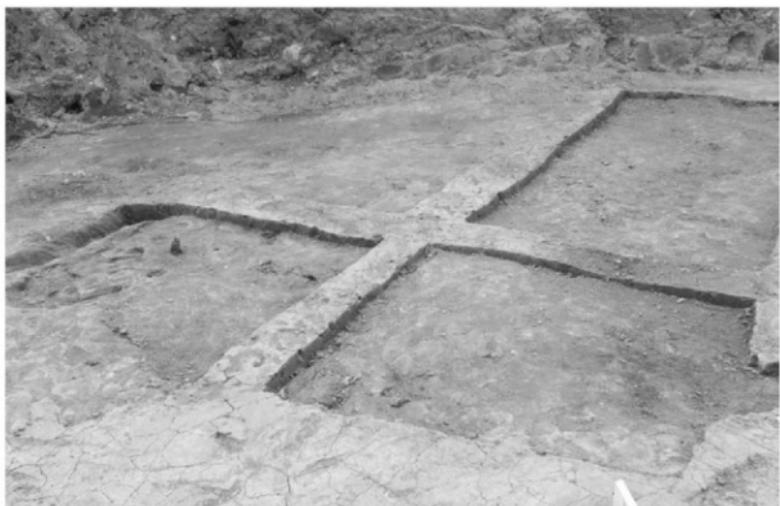
TT 1
ST 4 遺物出土状況
(南から)

TT 1 ST 4 調査状況

写真図版2



調査区検出状況（北東より）



S T 1 調査状況
(上：西から 下：南西から)



ST 2調査状況
(上:西から 下:南から)

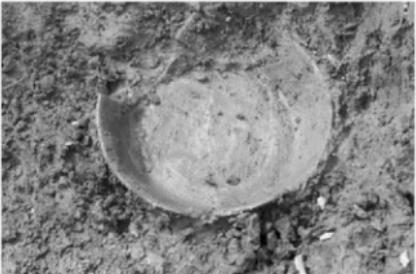
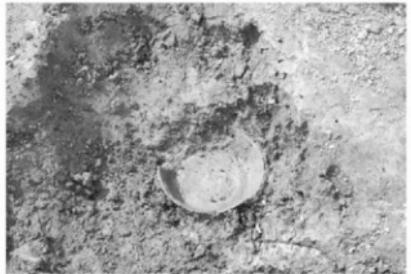


SK 4調査状況 (上:北西から)

ST 2・SK 4調査状況



S T 3 遺物出土状況
(左:南から 右:東から)



S T 3 遺物出土状況 (北から)



調査区完掘状況 (西から)



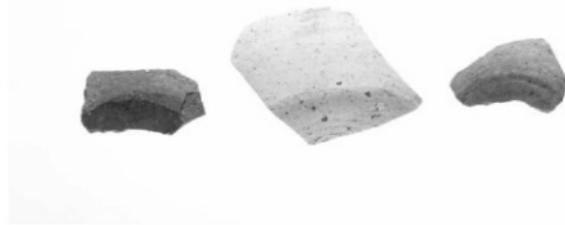
S T 1 (手前) S T 2 (奥) 完掘状況 (西から)



S T 2 完掘状況 (南東から)



調査区完掘状況（西から）



ST 1・2 須恵器壊
(第12図1, 2, 3)



ST 3 土師器甕 (第12図5)



ST 3 土師器甕 (第12図6)



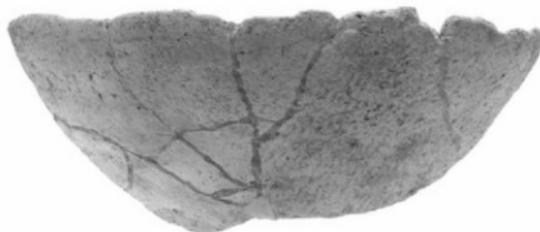
左: ST 3 土師器甕 (第12図7)
上: ST 3 須恵器壊 (第13図1)



S T 2 土師器丸底壺（第 12 図 4）



S T 3 土師器丸底壺（第 13 図 2）



S T 3 土師器壺（第 13 図 3）



S K 4 須恵器（第 13 図 4～6）

S T 2～3・S K 4 出土遺物
写真図版 10



弥生土器（第13図7・8）



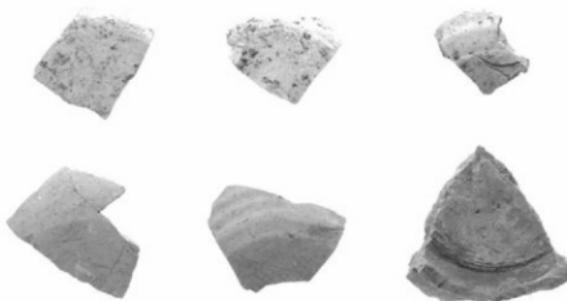
古墳時代 土師器
(左上から第13図9～13)



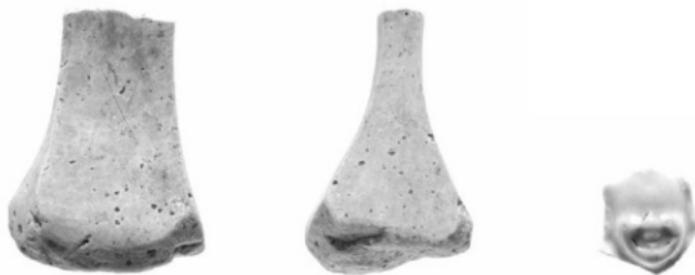
台付脚部（第13図14）



台付脚部（第13図15）



須恵器
(上段: 第13図16、18 第14図2
下段: 第13図17 第14図1、3)



砥石 (第14図4) 陶器 器種不明 (第14図5)



土師器丸底壺 (第13図12)

弥生土器 (第14図6・7)



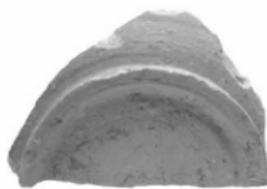
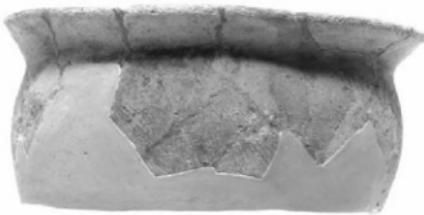
試掘トレンチ内住居跡 土師器甕（左：第14図10
上：第14図9）
須恵器蓋（下：第14図11）



縄文土器（上：第15図1）
土師器（右：第15図4）



土師器 丸底壺（第15図5）



土師器塊
(上: 第15図2
下: 第15図3)

須恵器壺（第15図6）

報告書抄録

南陽市埋蔵文化財調査報告書第 14 集

沢田遺跡

2017 年 3 月 31 日

発行 南陽市教育委員会
〒 999-2292 山形県南陽市三間通 436 番地 1
電話 0238-40-3211

印刷 有限会社 文進堂印刷
〒 999-2221 山形県南陽市柄塚 811 番 3 号
電話 0238-43-2116

